

小中をつなぐ英語教育カリキュラムの研究

—「話すこと」に焦点を当てて—

桑原 里美^{*1}・櫻井健一郎^{*1}・中原 育代^{*1}・寺内 健^{*2}
高橋 俊章^{*3}・藤本 幸伸^{*3}・猫田 和明^{*3}

Developing a Coherent and Sequenced ESL Curriculum for Elementary and Junior High Schools:
With a Special Reference to Speaking Skills

KUWAHARA Satomi^{*1}, SAKURAI Kenichiro^{*1}, NAKAHARA Ikuyo^{*1}, TERAUCHI Ken^{*2},
TAKAHASHI Toshiaki^{*3}, FUJIMOTO Yukinobu^{*3}, NEKODA Kazuaki^{*3}

(Received August 2, 2018)

キーワード：小中連携、到達目標とカリキュラム、話すこと

はじめに

新学習指導要領の実施にともない、山口大学教育学部附属学校園においても幼小中一貫教育が実質的に開始された。今後、小学校3年生から外国語活動がスタートし、5年生からは外国語が教科化され、小学校段階で養われた英語の知識・技能や態度の評価も行われることになる。そのため、従来のように、中学校からゼロベースで英語の指導を行うという発想は成り立たない。小学校段階で培った経験を基に継続的・系統的な教育カリキュラムの作成とそれに合致する指導方法や言語活動について検討することは喫緊の課題であり、本研究ではまず、小中連携のためのカリキュラムの検討と、その中での中核的プロジェクト（小学生に向けて中学生が行うプレゼンテーション）の効果について検証する。

研究の目的として、7年間の学びを系統的に捉えることにより、児童が小学校段階で身につけるべきコミュニケーション能力の姿を明確化したいと考えた。また、小学校で獲得した英語の知識・技能や態度を基礎として、中学校での英語教育に効果的につなげることにより、児童生徒の意欲を維持し、また、コミュニケーション能力をより効果的に発展させることができるのではないかと考えた。

本研究では、英語コミュニケーション能力のうち、「話すこと（発表）」「話すこと（やり取り）」に焦点を当て、小学校3年生から中学校3年生卒業時までの各学年の到達目標を決定し、それに合わせて7年間のカリキュラムを作成し、各学年の到達度の評価方法としてどのようなプロジェクトを用いるかについて話し合った。その際、小中で共通の領域で授業研究を行ったり、大学教員と附属学校の教員間や附属学校の教員間で定期的に会議を行ったり、小・中学校の授業を共に参観しあったり、小・中学校の教科書を突き合わせて教材分析することにより、児童生徒の課題を洗い出した。以下はその研究の報告である。

1. プロジェクトの実際とその成果

1-1 小中の英語の授業を通して育てたい三つの力

幼小中一貫教育に向けて、外国語科におけるめざす子どもの姿を、「よりよい未来を、他者とつながりながら創り出すために自主的に歩み続ける子ども」とした。そして、このめざす姿を具現化するためには、小中7年間を通じた外国語活動・外国語科の授業で、児童生徒のどのような力を育てていくべきかを協議し、育てたい力を3つにまとめた。

*1 山口大学教育学部附属山口中学校 *2 山口大学教育学部附属山口小学校 *3 山口大学教育学部英語教育

ア Autonomy (自ら言葉を獲得し、知識・技能を総動員して表現する力)

イ Relatedness (相手意識をもって人と関わろうとする力)

ウ Persistence (失敗を恐れず、英語を使って伝え合おうとする力)

一つ目は「Autonomy (自ら言葉を獲得し、知識・技能を総動員して表現する力)」である。言葉は与えられるものではなく、自らが獲得するものと言われる。「伝えたいことがある」という思いを大切に、知識や技能をフル活用して何とか伝えようとする児童生徒を育てたいと考える。二つ目の育てたい力は「Relatedness (相手意識をもって人と関わろうとする力)」とした。言語はコミュニケーションのためのツールである。どんなに高度なツールをもっていても、他者を理解しようとする気持ちが根底になれば、真のコミュニケーションは図れない。相手を思いやりながら関わることができてこそ、これからの国際社会をよりよく生きることができるであろう。最後は「Persistence (失敗を恐れず、英語を使って伝え合おうとする力)」である。外国語を学習する者であれば誰もが、失敗を恐れるがゆえに使うことを躊躇してしまったり、伝えることをあきらめてしまったりという経験をもっているであろう。これからの多様な社会を主体的に歩み続けるためにも、すぐに失敗にめげてしまったり、あきらめたりすることなく英語を使って伝え合おうとする粘り強さが必要であると考え、三つ目の育てたい力とした。

以上のことを踏まえ、三つの力を育てていくために、小中を通じて大切にしていきたいことを再確認した。それは「実感」「関わり」「つながり」「聴く」の4つである。この中でも、特に重点を置いて取り組みたいと考えるのは「聴く」活動である。児童生徒の日頃の様子を見ていて、自分の思いを伝えることには一生懸命だが、相手の伝えたいことを意識して「聴く」ことが不十分であると感じることがしばしばある。そこで、反応を大切にしながら他者意識をもって「聴く」ために、リアクションを重視した学習活動を仕組みと同時に、“伝えなくなる”“聴きたくなる”題材やトピックを選ぶことも大切にしたいと考えた。そうすることで、仲間との「つながり」が深まり、学んだという「実感」をより得られる授業の実践につながることを確認した。

1-2 「話すこと」において、対話の展開を工夫する面白さに着目した中学校における取り組み

本研究では、小学校と中学校の英語の授業において、指導が求められている「話すこと(やりとり)」に着目し、小学校と中学校それぞれの到達目標を検討することとした。小学校においても、「話すこと(やりとり)」の指導は行われるが、中学校での「話すこと(やりとり)」は小学校のそれと本質的に何が異なるのか、検討が必要である。

ここでは、中学校段階での取り組みとして、対話のつなぎ方を工夫し、対話の展開を広げることのおもしろさを味わう授業—中学校2年生 スキット作りを楽しもう—という実践の内容・目的やその効果について報告する。

① 教材選択の意図

授業の帯活動で行うチャットやフリートークの様子を見てみると、何か伝えたいという思いはあるが、どのようにリアクションしたらよいか、どのように尋ね返したらよいかがわからず対話が単調になったり停滞してしまったりしている生徒の姿がよく見られる。また、さらに掘り下げて聞くことができず、一方的な伝達で終わっているという場面もしばしばあり、生徒にとって会話をつなげたり広げたりすることに課題があると考えた。そこで、生徒にチャットやフリートークについてアンケートを行ったところ、「好き」「どちらかと言えば好き」と感じている生徒の方が多かった(66%)。また、「あまり好きではない」「嫌い」と感じている生徒(34%)も、相手に自分の言いたいことが伝わったときに達成感を感じたり、対話が続いたときに楽しいと感じたりしており、抵抗感をもちながらも「英語で対話する楽しさ」を体感していることがわかった。また、どんな英語力を身につけたいかという問いには、チャットやフリートークの好き嫌いにかかわらず、「英語を話す力」「対話力」という回答が多数見られた。このことから、生徒は英語を使って会話のキャッチボールができるようになりたいと感じていることがわかる。しかしながら、自分の思いを英語で具体的に相手に伝えたり、相手の意図を汲み取って的確にリアクションしたりする力は、自然と身につくものではない。まずは、様々な場面や状況に応じた返答の仕方やリアクションの返し方のモデルを提示することが必要である。そしてそれをくり返し練習し、さらに自分なりにアレンジしながら使っていく中で体得していくものであると考えた。今回の実践では、生徒は実際に対話する中で、会話のつなぎ方を方略的に学び、また、それを用いて実際にスキットをつくることで、対話のつながりが具現化され、生徒自身のイン

タラクティブなやり取りのイメージを膨らますことができると考え、本単元を教材として選択した。

② 授業の実際

ア 対話のつなぎ方を学ぶ。

既習のダイアログをふり返り、どのようなシーンでどのような対話をつなぐ言葉が使われているか整理した。ここでは、対話をつなぐ言葉を「くり返して確認する」「あいづちを打つ（反応する）」「質問する」「自分の感想や意見を伝える」に分類し、対話の際それぞれにどのような効果があるかを考えた。

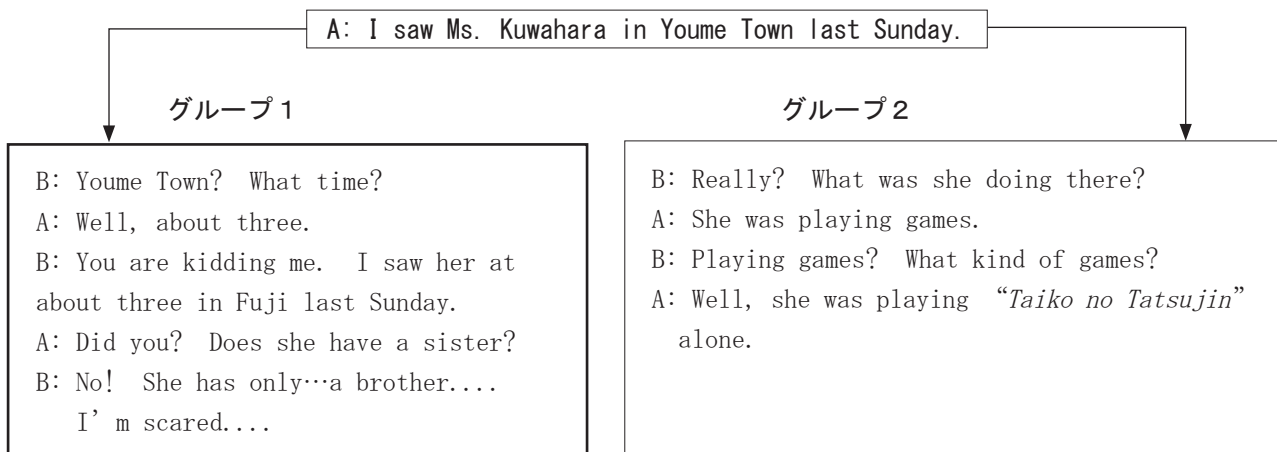
イ 対話のバリエーションを考え広げる。

相手が言った内容に対してふさわしい返事を選ぶ活動を通して、対話のバリエーションを増やした。また、対話をつなぐ返事は一つだけではないことを確認し、返事によって話の展開や相手の感じ方や受け取り方が変わることを実感した。

- | | |
|-----------------------------|--|
| ① We missed the bus. | • a. You are kidding me. |
| ② Oh, no! I lost my wallet. | • b. No problem. Let' s walk. |
| ③ Johnny Depp is cool. | • c. Hey. What happened to you? |
| ④ It will rain soon. | • d. Oh, no. We have forty minutes until the next bus. |
| ⑤ I have to go home now. | • e. A UFO? Where did you see it? |
| ⑥ I think he/she loves you. | • f. Should we go back home? |
| ⑦ I saw a UFO yesterday. | • g. Oh, come on. We just started the game.
• h. Exactly. Are you going to see his new movie? |

ウ ミニスキットをつくる。

提示された英文からどのように対話をつないでいくかを工夫し、ミニスキットをつくり、ペアで演じた。つなぎ次第でストーリーの展開や結末が全く違うものになるおもしろさに気づくことを意図し最初の文を固定した。生徒は、登場人物の性格等を考え、より自然な対話になるように工夫しながらスキットをつくり、ペアで演じた。以下に生徒の例を示す。



エ 6～8文程度のスキットをつくる。

場面、登場人物、話題を生徒が一から設定し、相手が聞きたくするような内容をめざし、スキットづくりを行った。本単元の前に生徒は「英語落語」を学習しており、スキットの最後にオチをつけようと試行錯誤するペアも多かった。できあがったスキットは、グループ内でペアごとに演じた。その際、ジェスチャーや声色、表情などスキットの中には表現されていない部分も工夫しながら、相手におもしろさがより伝わるように工夫する様子が見られた。

③ 授業の考察

○ 言葉は場面を与えられてはじめて意味をもつ

“What are you doing?” という一文も、場面や状況、発話者の心情などによって意味は大きく異なる。最後のスキットづくりでは、場面や登場人物を設定する活動を丁寧に行うことで、セリフの一つひとつが対話の中でどのような意味をもち、どのような役割を果たすのかを意識させることができた。また、場面の雰

困気や登場人物の心情を伝えようと、顔の表情や声のトーンなどについてもペアで追究する姿が見られた。相手に何とか伝えようと試行錯誤する中で、言語では表現しきれない部分や微妙な感情の機微をも伝えられる非言語コミュニケーションの重要性にも気づくことができた。

○ スキットの始まりの文を提示することが、対話のつなぎ方を多様なものにした

本単元では「対話をつなぎ、その内容を発展させる」ことをねらいとした。「つなぐ」「広げる」ことを意識させたいという思いから、ミニスキットをつくる学習活動では、あえて最初のセリフを提示した。全員が同じセリフからスタートする分、生徒は次の対話を「どうつなげるか」に集中することができた。結果、一つとして同じ展開のスキットはなく、対話のバリエーションも自然と広がっていった。このように、活動にあえてしぼりを与えることで、思考の広がりを促すことにつながるのではないかと推察する。

1-3 「話すこと（やりとり）」と即興的楽しみに着目した中学校における取り組み

新学習指導要領の「話すこと（やりとり）」においては、即興的に自分のもてる知識を使い、話したり、相手の発話に反応することが目標とされている。以下の実践は、中学校1年生を対象とした流ちょうさに焦点を当てた授業で、即興で物語を作る（即興口頭英作文）楽しみを知ることを目的としている。また、活動に創造性を持たせることにより、相手の話の内容に反応しながら会話をつなげたくなり、他者への意識を自然に持つことができるのではないかと予想した。

① 教材選択の意図

授業に関するアンケートや生徒の様子から、ある話題についてペアで会話を継続する上で、相手の発言に対するリアクションやコメント、質問などが大切な要素であると生徒は十分認識してはいる。しかし、実際の会話の中で会話継続の方法を十分活用できるまでには至っておらず、そのため、相手との会話をうまく展開できず、他者と関わる楽しさや会話の内容を深めていくおもしろさを感じられずにいる。

また、外国語活動・外国語（英語）科で育てたい三つの力を育み、発揮することができるようにするためには、「相手に伝えたい、相手の考えを聞きたい」と思わせる内容について話し合いができる場を設けることが大切だと考えている。その上で、相手にわかりやすいように工夫して伝えることや相手の話に対してリアクションをして、他者を思いやりながら関わることのできる児童生徒を育てたい。

そこで、英語の知識量にそこまで気を取られることなく、もてる知識を駆使しながら会話をつなげ、他者と関わることの楽しさを感じられるような授業を考えた。

写真1（平成27年版Sunshine 1, p.96の写真、著作権上の理由から不掲載）は、湖で釣りをしている男性の隣に子熊が立っている写真である。もしも子熊が話すことができるならば、男性とどのような会話がなされるかについて考え、短い物語にしていくのが本時の課題である。二人組で役割分担し、即興で会話しながら物語を作るとなると、情報交換だけが目的の会話ではなく、内容やつながりを考えながら物語を完結させていく必要がある（ストーリーリレー）。つまり、生徒は相手が会話をどのようにつなげて物語を作っていくか（内容）に興味を感じ、自然に相手の発話に関連のあることを話さなければならない状況に置かれる。そのため、もてる知識を駆使しながら何とか会話をつなげ、楽しく物語を作っていくのではないかと考えた。

② 授業の実際

生徒は、日頃の授業の中で即興的なやり取りを支えるコミュニケーションストラテジー（以後CS）（質疑応答やパラフレーズなど）を継続的に学んでいる。その理由は、事前準備をせずに即興で会話させるためには、言いたい表現が思いつかない場合などの状況でも、何とかして会話を展開・維持することができるという手だてが生徒に必要となるからである。ただし、本時の段階ではCSを効果的に使いながら会話を継続・発展させるペアはまだ少数という段階である。

本時もペアで会話する機会を授業の最初に設けた後、一問一答の会話とそうではない会話を示した。生徒は、その二つを比較してみて、一問一答ばかりの会話は「取り調べを受けているようだ」とか「機械的な作業のようだ」と感じていた。それに対してリアクションやコメントのある会話に対しては「これが普通」とか「相手のことに興味があるみたい」と、単発的でつながりのない会話は不自然だととらえており、また、関連性のある質問で会話を展開させた方が興味や関心が相手に伝わるようだとも認識しているようであった。

次に、写真2（複数の小動物が身を起こして同じ方向を見ている写真、著作権上の理由から不掲載）の動物になりきり、即興でストーリーリレーをさせた。とはいえ、いきなり即興で作りなさいと指示しても生徒が戸惑うため、教師側で簡単な英語の表現を使った例を提示した。また、クラス全体と教師が交代で少しずつ

つ会話を作っていく活動を行うことで、生徒にどのような物語を、どのようにして作ることを求めているかを実演し、ペアで取り組みやすいようにした。生徒は簡単なあいさつを交わしながら次第に場面や2匹の関係性を会話しながら決めていき、相手の発言に自然にあいづちを打ちながら物語を作っていた。そのときの会話の一つ（あいさつ以降）を以下に示す。

A : What food do you like?	B : I like sushi and udon.
A : Oh, me too. I like cold udon.	B : Really? I like hot udon.
A : No, no. Cold udon is good. Hot udon in summer, 汗... salt water ダラダラ (ジェスチャーをつけながら) but cold udon in summer, it's cool. OK?	B : Cold udon in winter, it's very cold but hot udon in winter, it's ポカポカ... warm.

ペアの会話を共有しながら、それぞれの会話で何がよかったのかを確認していくと、生徒からあがった意見は「相手の発言を聞きながらうなずいていた」「相手の言ったことをくり返していた」「英語がわからないときはジェスチャーをつけながら別の言い方をしていた」などであり、生徒は自分たちがCSをたくさん使っていたことを確認した。また、夏の暑い日はhot udonだと汗がダラダラでダメだという発言に対して、冬だとポカポカで暖かいのでよいと会話を切り返しており、クラスの生徒たちもその会話の展開をととても楽しそうに聞いていた。それから、前頁で示した釣り人と子熊の写真を見ながら即興で物語を作らせる活動を行い、全体で物語の内容を英語で共有して授業を終了した。次時に生徒は即興会話で作った物語をワークシートに書き起こした。

③ 授業の考察

ここでは、生徒が英語を使って他者と関わることに楽しさを感じられるようにする工夫について考察する。

○ 物語の人物設定を工夫することで、内容を重視したfluencyを高めることになる。

私たちが使う英語は、accuracy（正確さ）とfluency（流暢さ）が求められるが、本時ではfluencyを重視し、fluencyを練習するための即興的な状態で、ストーリーリレーを行った。生徒は写真の中の動物同士、または、釣り人と子熊になりきり、会話によってさまざまな物語を作ったが、これらの写真と会話作りの手順が工夫の一つである。それは、登場する動物は単語しか話せない、また、文法をほとんど知らないという設定にもしやすいため、生徒は、言語能力にそこまで気を取られることなく、内容を重視して物語を展開していくことができた。そして、写真2では、短いやり取りでも物語になるという教師による例を示し、それから、クラスを半分に分けて2匹の役割分担をし、各グループからの発表をつないで物語を作った。そのため、どの生徒も今後することに対する見通しをもつことができたと同時に、英語の型や構造よりも、話している内容に意識を向けることができたと考えている。発展課題である写真1では、子熊はあまり英語がわからないという設定とし、釣り人が身振り手振りを交えながらパラフレイズして（別の表現に変えて）会話をつなげているペアも見られた。

○ 同じ題材で何度も会話することは、生徒の自立性を高めることになる。

本時のストーリーリレーでは、登場人物の役割や話す相手を代えての会話、そして、全体で共有した後に再度役割や話す相手を代えて物語を作っていた。生徒は自分で試行錯誤し、内容や使う英語を考えているうちに、過去に習った表現をふり返ったり、相手の表現をまねしたりしながら、物語を改善していった。じっくり考えて最高の物語の一つだけ作らせる授業よりも、より多く作りながら体験的に学ばせる授業の方がよりよい作品ができると考えられる。また、そこでくり広げられる会話は、仲間と価値を共有し、楽しい時間を過ごすという会話本来の目的に沿ったものになっていた。そのことは、本時をはさんで1カ月後に行ったアンケート結果からも生徒の会話に対する意識の変化が見て取れる。【（ ）内の数字は前回調査の結果】

ペアで英語を使って話をすることは好きか？ (%)	はい 68 (51)	いいえ 5 (9)	どちらとも言えない 27 (40)	
会話をするとき、話が續かないことがあるか？ (%)	よくある 11 (25)	たまにある 39 (58)	あまりない 41 (16)	全くない 9 (1)

全体的には、事前の期待通りの成果が得られたが、一つ課題として残ったのは、1単位時間の中でのaccuracyの取り扱いであった。今回行った授業では、生徒が授業中に作った物語をワークシートに書かせ、

後日、英語表現の誤りを修正し、生徒にフィードバックした。しかし、会話をしているときにも語法上の誤りはたくさんあり、誤ったままで別の相手とも何度も会話を続けていたことを考えると、1単位時間内のフィードバックの方法がこれでよかったかという点では、まだまだ改善の余地があると感じている。今後、正確さと流暢さの両方を確保しつつ内容を重視し、英語を使って他者と関わることの楽しさを感じることで授業を積み重ねていきたい。

1-4 「話すこと（やりとり）」と英語でコミュニケーションする楽しみに着目した小学校における取り組み

小学校段階においても「話すこと（やりとり）」の指導は求められるが、当然、中学校段階で求められる到達目標とは異なってくる。小学校6年生を対象として行った以下の実践においては、3つの支援を児童に提供することにより、英語でコミュニケーションをする楽しさを共有しつつ、小学校段階でも指導が可能な会話のやりとり・反応について考察を行った。

1-4-1 取り組みの意図とねらい

① 教材選択の意図

本学級の子どもたちは、Lesson2「When is your birthday?」、Lesson3「I can swim.」の学習で、誕生日やできることを尋ねたり答えたりする表現や語彙に慣れ親しみ、会話に取り組んだ。その中で、互いの誕生日、得意なことや得意ではないことなどを知ることができた。しかし、尋ねたいことを尋ねた後に、質問や反応をし合いながら会話をつなげる姿には至っていない。そこで、本単元において、時刻、行動についての語彙や一日の生活時間について尋ねたり答えたりする表現を活用し、会話をする学習に取り組む。このことは、自分と比べながら質問や反応をし合い、他者の新しい一面に気付いたり違いを認め合ったりして、互いの理解を深めていくことにつながるであろう。

② 外国語科でめざす子どもの姿を実現するために

単元名：Lesson6「What time do you get up?」（Hi, friends2）

本単元は、相手の一日の生活時間について尋ねる「What time do you～?」、自分の一日の生活時間について答える「I～at○.」の表現や、時刻、行動についての語彙に慣れ親しみ、学んだ表現や語彙を活用して会話をする単元である。以下の支援を具体化することで、3つの力を発揮した子どもの姿を見取り、成果と課題について記す。

- ア 単元の導入においてALTと担任が一日の生活時間について会話をするデモンストレーションを見せる。そうすることで、会話の意味を推測しながら聞き、表現や語彙に気付くことができるようにする。
- イ 毎時間の導入においてペアで行う会話後、相手に反応を返すことができた子どもに、どんな反応を返したのかを問う。そうすることで、仲間の反応の仕方を共有することができるようにする。
- ウ 毎時間の終末に、身近な人の一日の生活時間を英語を使って知ることのできた楽しさについて記述した振り返りを見取り、全体に紹介する。そうすることで、英語でコミュニケーションを図る楽しさを共有することができるようにする。

1-4-2 学びの実際と考察

① 支援アについて

単元の導入において、何を話しているのかを想像しながら聞くよう促し、担任とALTのデモンストレーションを見せた。【支援ア】右は担任とALTとの会話である。子どもたちには「何を話しているか考えながら聞きましょう。」と投げかけてから会話を聞くよう促した。会話を聞いた後、子どもたちは以下のように発言した。

ALT:Hi, Can I ask you some questions?
JTE:Sure.
ALT:What time do you go to bed?
JTE:I go to bed at 12.
ALT:Really!?. And, What time do you get up?
JTE:I get up at 5.
ALT:Wow!! Thank you. Take care.

教師：That' it. OK? どんなこと話していたか分かった人。Sさんどうぞ。

S児：エカテリーナ先生が、What time って言った。

教師：What time って何て意味？

子ども：いつ。何時。時刻。時間。

教師：なぜ分かったの？

S児：time.

M児：What が「何」で

Y児：「何」「時」何時

教師：これは何時かをきいているんですね。他に聞こえたことありますか？

M児：先生が、5時に起きるって言う前にエカテリーナ先生が、up up って…だから、起きるって、(手のひらを上に向けて両手を上下に動かしながら発言)それはきっと、自分の体を起こす、起きるって言葉なんじゃないかなと思いました。

S児やY児は、聞いたことのある語彙を手がかりに、会話の意味を推測し始めた。M児のように、「up」の意味をイメージして意味を推測しようとする姿も見られた。このように、単元の導入で、意味を推測しながら担任とALTの会話を聴くよう促すことで、生活経験やこれまでの学んできた語彙や表現に気づき、会話の意味を推測することができたのである。

② 支援イについて

毎時間の導入において、あいさつやその日の気分を尋ね合った。毎時間の学習の中で、子どもたちの様子から、うなずいたりアイコンタクトをしたりする子どもの価値付けを繰り返し行った。本単元でも反応を返している子どもを見取り、どんな反応を返したのか問い、反応の仕方を共有した。【支援イ】以下は子どもと教師のやりとりの一部である。

教師：OK, Can I have a reaction? (20人くらい手を挙げる)

教師：Wow!! 友達のいいところ言える人いますか？リアクションで。

Y児：はい、えーっと、Sさんが、それをもう一回…、ぼくが変なこと言ったときに、

教師：Yくん、どんな変なこと言ったの？

Y児：悲しくて、うれいってぼくが言ったら、聞き返してくれました。

S児：なんかよく聞こえなかったから。

教師：Sさんは、なんて聞き返したの？【支援イ】

S児：One more time please.

教師：今みんな聞こえた？【支援イ】

子ども：One more time please.

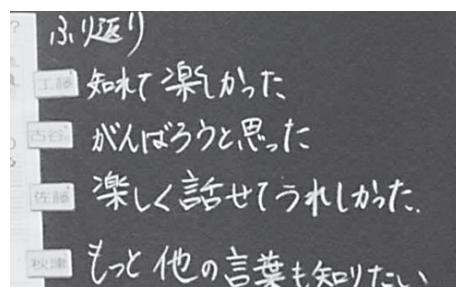
教師：Oh, One more time, please! Good! (拍手) Y君の話を聞こうとしたからこそ出たSさんのリアクションでしたね。【支援イ】

あいづちやアイコンタクト、「I see.」「Wow.」「Me, too.」など相手の話に反応できるようになってきているが、相手の発言が聞き取れない場合は、もう一度問い返すことも反応だと考える。子どもの会話から相手の話を聞こうとしたり分かってほしい様子を見取り全体に紹介し価値付けることで、仲間の反応の仕方を共有することができたのである。

③ 支援ウについて

授業の終末に、身近な人の一日の生活時間を英語を使って知ることのできた楽しさや次時からの学習に対する意欲について記述した振り返りを見取り、全体に紹介した。

【支援ウ】「友達の生活時間について知ることができて楽しかった」「友達と英語で話せて楽しかった」という学習の楽しさを語る子どもや「まだ発音がうまくできないのがんばろうと思った」「もっと他の生活時間についても聞けるように他の言葉も知りたい」という次時への学習について話す子どももいた。教師が求める子どもの姿を明確にもち、その姿を全体に紹介することで、次時からの学習に期待をもつことができたのである。



振り返りのときの板書

1-4-3 今後の課題

今後は、日常に近い場面設定を行いたい。本単元で学習した表現は、習慣を尋ねたり答えたりする現在形のWhat time do you～?である。しかし、習慣を尋ねたり答えたりする場面設定になっていなかった。その結果、寝る時刻と寝た時刻のどちらを学習しているのかを迷っている子どももいた。そこで、朝学校に来る時刻や学校から帰る時刻が書かれた、1週間分の教師のスケジュールを提示することが考えられる。そうすることで、何時に起きて何時に寝ているのだろうと疑問をもちやすくなるだろう。子どもが会話をする必要感をよリモてるよう工夫し、学習を展開していきたい。

2. 「話すこと」に着目した7年間の学習活動のカリキュラム作り

新学習指導要領に掲げられた5領域のうちの「話すこと（やりとり）」および「話すこと（発表）」について、各学年における具体的なゴールを設定することができた（以下の表参照）。

小中をとおしてめざす子どもの姿（到達目標）を明確にし、そのために育てるべき力（3つの力）を具体的に共有することで、中学卒業時のゴールまでを見通すことができるようになった。また、3つの力、到達目標を共有したことで、児童生徒をみとる視点が定まり、異なる校種間でも良さや課題を話し合えるようになった。小学校と中学校の教員が連携することで、これまでの英語学習において足りなかった点、または、生徒に求めすぎていた点などを確認することも可能になり、発達段階に応じた指導の重要性が認識できた。

さらに、小学校と中学校の教員、および大学の教員が参加した合同会議や授業研究等を通じ、附属学校における連携上の課題や英語カリキュラム開発上の課題（例：発達段階における到達度の適切さ）について意見交換ができ、共通理解と課題の共有を達成することができた。

学年	話すこと（発表）	話すこと（やりとり）（small talk）
9th（中3）	卒業に向けて自分自身についてプレゼンしよう。	相手の意見につなげてコメントする。
8th（中2）	夢の商品を売り出すCMを作ろう。	話題を深める質問をする。
7th（中1）	自分の経験とつなげてstoryを語ろう。	相手の発言に反応する。
6th（小6）	自分のしたいことを語ろう。	2往復の対話ができる。
5th（小5）	尊敬する人について語ろう。	疑問詞を使って問答する。
4th（小4）	自分の一日について話す。	自分に関することについて問答する。
3rd（小3）	まわりにある物を英語で言う。	身の回りにあるものについて問答する。

3. コア・プロジェクトとしての発表会の開催

中学3年生のスピーチ発表会に小学6年生の児童を招いた。中学3年生は、同級生を聞き手としてスピーチを作成したが、聞き手が6年生になったときには、関係代名詞などを用いた長文をなるべく減らし、単文を用いたり、ジェスチャーを用いたりしながらわかりやすいスピーチを心がけようとしていた。印象的だった場面は、スピーチの途中で、中学生が何度も小学生に質問して理解度を確かめながらスピーチを行っていたことである。また、中学生が話す英語を一生懸命に聞き、質問をしようとしていた児童の姿は、これまでの外国語学習で培った力を発揮させよう、伝えてみようという思いをひしひしとを感じるものであった。

4. プロジェクトの成果

1年間の取り組みによって得た成果は以下の通りである。

ア Autonomy（自ら言葉を獲得し、知識・技能を総動員して表現する力）について

それぞれの実践において、場面や登場人物の状況を意識しながら対話したり、スキットを作成したりすることができた。教師が、考えなくなる写真やトピックを与えることによって、生徒は、自然に場面や状況を

内発的に考え始め、既習表現を駆使しながら仲間と関わることができることを確認できた。

イ Relatedness（相手意識をもって人と関わろうとする力）について

事後アンケート（1－3参照）の結果、ペアで英語使って会話することが好きと回答した生徒が増加した。

ウ Persistence（失敗を恐れず、英語を使って伝え合おうとする力）

イの場合と同様に、アンケート調査の結果、会話を継続する能力が増したことがわかる。ただし、今後の課題でも述べるが、伝えたいことをうまく表現できないために、相手が言葉に詰まった際、相手の発言を待ったり、相手のことを知ろうとする姿勢が十分ではないこと。同様に、表現が思い浮かばないときでも相手の発話に対して何らかの反応を返すことに関しては課題が残った。断片的な発話でもコミュニケーションは可能で、表情やジェスチャーなどを含め、相手の発話に何らかの反応を返すことはコミュニケーションの根幹となることなので、引き続き、指導が必要な領域であることを再確認した。

全体として、想像以上にプロジェクトから得た収穫は多かったが、5の課題で述べるように、小学校4年間と中学校の3年間のどの時期にどこまでの能力や態度をどのような方法で身につけさせて行くのかについてさらなる検討（カリキュラムに関するプランニング）を行う必要性を確認した。

5. プロジェクトに関する今後の課題

5-1 3つの力についての課題

外国語科・英語科で目標とした3つの力についての課題は以下の通りである。

ア Autonomy（自ら言葉を獲得し、知識・技能を総動員して表現する力）

「話すこと」における正しさについて、適切なフィードバックの方法を探ることが課題として残った。口頭でのやり取りでは、その場で修正することが困難な場合もある。適切なフィードバックのタイミングと方法を探ることが今後の課題である。

イ Relatedness（相手意識をもって人と関わろうとする力）

言語の使用方法を学ぶだけではなく、1単位時間や単元ごとに学習したことを表現する場面を計画し、実施する必要性を感じた。その際、一緒に学習しているクラスメイトだけではなく、異学年交流や校種間交流をしたり、異文化をもつ人々とも交流したりする機会を計画的に設定する点について検討したい。

ウ Persistence（失敗を恐れず、英語を使って伝え合おうとする力）

小中合同会議で児童生徒の課題を話し合った際、聞くことができない児童生徒が多いことが課題となった。言いたいことを片言でも伝えようとしていたり、ジェスチャーやパラフレーズなどのストラテジーを用い、相手の話になんとかして反応し、相手の発言を受け取ろうとする児童生徒を育てたいと考えている。

5-2 小中をつなぐカリキュラムの編成に関する課題

小中をつなぐカリキュラムの編成に関する課題は以下の通りである。

ア 5領域における到達度を設定する

5領域とは、新学習指導要領において「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」と記されている。特に、新しく加わった「話すこと（やり取り）」において、言葉を使って関わる際、他者を思いやりながら関わるができる生徒の姿や失敗を恐れず英語を使って伝え合おうとする態度を醸成したいと考える。もちろん、やり取りにおけるタスクを達成することや、相手の情報を正しく聞き取ったり、相手に情報を伝えたりすることができる言語力は必要不可欠である。しかし、上記のような関わり方ができるために、7年間を見通した領域ごとの到達度を示したカリキュラムが必要であると考えた。

イ 児童生徒が共働する機会を計画的に実施する

児童生徒にとって適切で魅力的なプロジェクト型学習を計画的に実施することで、その発表場面が形成的評価の一つとなり、次の学習へのエネルギーとなり、さらに自主的に外国語の学習に取り組むことができるのではないかと考えられる。そのため、児童生徒の到達度を見取るために、彼らにとって適切、かつ魅力的なプロジェクトを設定することが必要であり、小学校と中学校で協力して引き続き指導計画を作成・改定していくことが重要である。

参考文献

- 文部科学省（2018）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』。
文部科学省（2018）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』。